

はじめに

「日本国憲法がなぜ、北海道に適用されているのだろうか？」——勤務する室蘭工業大学の「日本の憲法」の授業のなかで、受講生にこのように尋ねることがある。問いかけられた受講生は一斉に怪訝^{けげん}そうな顔をする。その反応を見るかぎり、大多数の受講生が「担当教員はなぜ、このような奇妙な質問をするのか。北海道は日本の一部なのだから、憲法の適用は当然のこと。そんなことは尋ねるまでもない」と考えているように見える。尋ねるまでもないように思えるこの問いは、大日本帝国およびそれに続く日本国という国家の歴史的文脈から、北海道の成り立ちとその位置づけを思考するうえできわめて重要なポイントを含んでいる。

日本国憲法がいま北海道に適用されているのは、実のところ植民地主義と軍国主義にもとづく各政策を繰り返してきた大日本帝国の歴史と大いに関係がある。北海道は同帝国の政策の一環として帝国内に併合され、事実上の植民地として同帝国の支配下に置かれた。その結果、現在、日本国の都道府県の1つとしての北海道が存在している。言い換えれば、北海道は同帝国の植民地主義の帰結として、日本国憲法の適用下にある。しかしながら、本来、北海道とは先住民アイヌの土地である〈アイヌモシリ〉であり、日本政府はアイヌを先住民として〈認識〉しているにもかかわらず（2008年6月6日、衆参両議院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されている）、日本国憲法は先住民の集団としての権利をまったく保障していない。これは、いまなおアイヌに対する差別的視点にもとづく政策が継続していることを指し示す1つの例である。同時にこれは、基本的人権を基調とする日本国憲法の重大な欠点であるともいえるだろう。

アジア太平洋戦争末期、多数の北海道出身の兵士（アイヌ、和人）が沖縄に投入され、その結果、沖縄戦に動員された日本兵のなかでは北海道出身者が最大の犠牲者となった。この事実は、大日本帝国による北海道の人々に対する差別

的視点、すなわち棄^き民^{みん}化を表す1つの事例である。天皇主権国家である大日本帝国の最後の生命線であった本州を物理的に守るために、沖縄民衆を盾にしてその防波堤を築き、そこに遠く離れた北海道から兵士を〈捨て石〉の沖縄戦に派遣した。沖縄と北海道がともに同帝国の〈(内なる)植民地〉として位置づけられてきたからこそ、このような判断がなされたのである。言い換えれば、その意思を問わず帝国内の民衆・兵士として動員されてきた人々の間には、〈いのちの格差〉が明確に存在していたということになる。何よりも貴重な生命を出身地等の違いによって序列化し、異なる扱いを内在化する。これは植民地主義の残酷性をかたちづける1つの特徴である。

また、現在、北海道に自衛隊の施設が集中しているという事実(土地面積でいえば最大規模である)は、〈いのちの格差〉という大日本帝国の発想がそのまま継続されてきたことを表す一例であるといえよう。駐日米軍基地の約74%が沖縄に存在している事実とあわせて考えるときに、無自覚・無意識なものであろうとも、その〈正当化〉の論理の根底には同帝国から脈々と受け継がれてきた植民地主義者の発想が根づいていることが浮き彫りとなってくる。科学技術が発達した現在、隣国と〈国境〉を接する南北の地域であるという地政学上の理由をもって、このような事実を説明することはできない。この問題はまた日本国憲法14条がうたう「法の下での平等」の現実とその矛盾を考える際にも、避けて通ることができない議論のポイントとなろう。自衛隊や米軍基地の存在は、周辺住民を守るという名目とは裏腹に、「有事」の際の危険性、日常の騒音や潜在的・顕在的暴力の存在という観点からすれば、これらの地域に住む人々の「平和的生存権」の侵害に大きな関わりを有する問題でもある。そう考えるならば、沖縄同様、北海道も表面上は日本国憲法の適用下でありながら、事実上その番外地とされてきた側面があることを否定することはできないであろう。

さて、本書のキーワードの1つは「植民地主義」である。本書の目的は、過去から現在、そして未来へと続く1本の時間軸の上にある北海道の平和に関わる諸問題に着目しながら、大日本帝国と日本国の政策によってもたらされてきたさまざまな事象・出来事の背景を探ることにある。しかし決してそこにとどまるのではなく、最終的にはそれをふまえたうえで、北海道の未来の平和のあ

りようを読者の一人ひとりに熟考してもらうことをめざすものである。

植民地支配という負の歴史を検証することなくして、平和の道へと続く〈和解〉がもたらされることはない。日本を含む〈アジアの一大観光地〉（それは沖縄も同様である）となっている現在の北海道のもう1つの顔——歴史的にいかなる視点から構築され、現在に至るのか——を真正面から見つめ、それを真摯に受けとめる〈勇気〉とその後の歩みが強く問われている。北海道の広い大地を搾取や支配の対象としての大地ではなく、ひとの〈生〉を肯定し、また〈生〉を精神的・物理的に豊かに育む平和な大地へと転換しようとする試みこそが、北海道の未来の平和を築く鍵となるのではないだろうか。

本書は構成上、現在のテーマに焦点を当てることから始まる。この瞬間に生じているアクチュアルな課題を先に提示することでまずは足元の問題を問い（第Ⅰ部）、次にそれらの問題群と複合的に結びついている過去（しかしそれは決して文字どおりの〈過去〉ではない）の課題へと移る（第Ⅱ部）。最後に現在と過去の出来事から得た〈反省〉を北海道の未来の平和につなげるための足がかりを示す（第Ⅲ部）。

また、各章で十分に取り上げることができなかった関連する個別のテーマを【コラム】というかたちで各所に盛り込んでいる。本書の最後に収録している【座談会】とあわせて、読んでいただけると幸いである。

【清末愛砂】